

鹿児島医セン

鹿児島医療センター（循環器・脳卒中・がん専門施設）

2014.2 vol.94

緩和ケア研修会に参加して



平成26年1月12日（日）・13日（月）、鹿児島医療センター附属鹿児島看護学校にて、当院主催の第6回緩和ケア研修会を開催しました。受講生は1・2年目の歯科医師や研修医から臨床経験45年の医師8名、他職種13名が参加されました。講師・協力者として、KKR札幌医療センター・緩和ケア科・瀧川千鶴子先生をはじめ、県内から6名の医師、6名の認定看護師の皆さま、院内からも各部署から協力を得て滞りなく進行することができました。2日間タイトな研修内容でしたが、ロールプレイの講義では、臨床経験豊富な先生方のコミュニケーションスキルの高さを受講生はもちろん、協力者も気づきや学びになったのではないかと思います。今後も拠点病院の責務として、すべてのがん診療に携わる医師が緩和ケアに関する知識を習得し、患者さんとその家族にシームレスな緩和ケアを提供できるよう、研修会は継続していく予定です。しかし、他のがん診療拠点病院でも緩和ケア研修会を開催しているため、年々受講生の確保が難しくなっています。日々、現場でお忙しいとは思いますが、研修会は新たな気づきや学び、出会いの場になるかと思えます。今後も多くの医師、多職種の皆さまに参加して頂けたらと思います。

（文責：緩和ケアチーム 看護師 馬籠 さつき）

今回緩和ケア研修会に参加させていただきました。講義では緩和ケア概論から始まり、疼痛コントロールでのオピオイドの使用法、精神症状や呼吸困難感、消化器症状といった症状の評価や薬物療法を含めた対応について学ぶことができました。コミュニケーション力が試されるロールプレイでは、普段自分がいかに相手の気持ちを汲み取るといった部分が欠けていたかということを感じました。癌患者さんとの関わりの中で薬剤師としてやはり薬物療法に思考が偏りがちですが、まずは患者さんの背景を把握し、患者・家族が何を望んでいるのか、何を大事にしているのかを理解することに重点を置いていきたいと思いました。その関係作りとして、思いを表出しやすい環境を作れているか、常に念頭に置いて関わっていききたいと思います。2日間の研修の準備、サポートをしてくださったスタッフの方々に感謝します。本当にありがとうございました。

（文責：業務主任 大園 ゆかり）

今回緩和ケア研修会に参加し、ペインコントロールや呼吸困難、消化器症状への対応の仕方など実臨床で活かせる知識を学ぶこともできましたが、やはり一番勉強になったのは患者さんとのコミュニケーションの取り方についてでした。病状をわかりやすく説明することも大切ですが、患者さんやそのご家族が病気についてどのように考えているのか、またどのようなことを望まれているのか、というのを聞く時間を作るのも大切であることを他職種の方々とのロールプレイを通して改めて痛感させられました。すぐにできるようになるとは



思いますが、今後の診療で今回学んだことを常に心掛けていきたいと思っています。最後に、スタッフの方々の準備、サポートに大変感謝しています。ありがとうございました。

（文責：研修医 岡田 敬史）

平成25年度 脳卒中看護エキスパートナース研修を開催して

鹿児島医療センターでは、脳卒中の専門施設として、脳卒中看護の質の向上を図るための知識・技術・態度を習得し、より専門性の高い看護実践ができる能力を育成することを目的とし、①臨床経験5年以上及び脳卒中看護の経験2年以上、②脳卒中看護3年以上であり脳卒中看護実践の役割モデルとして将来期待できる者のいずれかの条件を満たす看護師を対象として脳卒中看護エキスパートナース研修を毎年開催しております。今年度も、12月2日から12月10日までの7日間、院外12施設13名、院内3名の計16名の研修生の参加で開催いたしました。

研修は、脳卒中の分類と病態生理、診断および治療と検査、運動・認知機能障害とその評価、脳卒中リハビリテーション、脳卒中患者のフィジカルアセスメント、重篤化回避・合併症予防の技術、高次脳機能障害の看護、脳卒中患者・家族の理解と支援などの講義や演習を通して、脳卒中看護について系統的に学べるような内容としました。講義は、院内の脳血管内科・脳神経外科の医師や脳卒中リハビリテーション看護認定看護師が中心となっており、脳卒中医療・福祉の現状、脳卒中の分類や病態に沿った治療、脳卒中による特徴的な運動障害やリハビリテーションの意義・目的を理解することで、今後、看護上のアセスメントを行う上でのより専門性の高い知識を得られた研修となったのではないかと感じています。

実習は、脳卒中病棟、SCU、ICU、手術室で実施し、急性期にある脳卒中患者のモニタリングと看護ケア、障害に応じたリハビリテーション、患者家族を取り巻くチーム医療や心理的社会的問題について理解を深められたと思います。事例検討では、急性期、回復期、維持期の事例を通して脳卒中患者・家族の全人的なアセスメントを行い、適切な看護介入について検討するとともに、生活再構築のための支援やセルフケア能力を高めるための援助について考えることができました。

今後、脳卒中看護エキスパートナース研修生には、脳卒中患者の看護実践を通して役割モデルを示し、患者個々に応じた自立支援のために、他職種と協働しチーム医療においてリーダーシップを発揮されることを期待しています。



そして私達も多くの施設の看護師や公開講座を通して他職種の方にも参加して頂けるよう研修内容を充実させていきたいと思っています。また、この脳卒中看護エキスパートナース研修を通して脳卒中地域連携における看護師間のネットワークの強化につなげていきたいと考えます。

(文責:東5階病棟師長 養田 尚美)

国際学会便り

(欧州心臓病学会ESC, 環太平洋不整脈学会APHRS, 米国心臓協会AHA)

平成25年はラッキーな年だった。今まで採用されていなかったCirculation誌に2編も論文が採用され、三つの国際学会にも参加できた。米国心臓協会AHAは招待されたものだった。

欧州心臓病学会ESCは8月31日から9月4日までオランダのアムステルダムで開催された。アメリカで開催される心臓病関係の学会参加者数が減少傾向にあるのに対し、ESCへの参加者は増加を続け、3万人が参加する一番大きな心臓病学会になっている。私の発表はポスターだったので学会を楽しむことができた。ESCでの発表内容はCirculation誌に掲載された。うれしかったのは、一昨年私たちの病院に留学に来たインゲさんに会えたことだった。インゲさんの指導医である水澤先生にお願いし研究室も見せてもらうことになっていた。伺ってみると、研究所のポスであるWilde先生自ら研究所および病院を案内してくれた。ポス自らの案内は初めてのことが多かった。研究所は心筋細胞培養、電子顕微鏡などの組織学的検査、遺伝子組み換え実験等、心臓の基礎的研究を網羅し、病院はアメニティからICUまで素晴らしいものだった。世界の遺伝性不整脈をリードできる筈と感じた。私自身もインゲさん以来Wilde先生との共同研究を続けている。



ESCでのポスター発表

10月3日～6日に香港であったAPHRSには2循の田上先生、山下先生も演題を出されていた。学会場だけでなく、食事と一緒にでき、楽しい学会であった。

AHA(米国心臓協会)は11月17日～20日にダラスであった。昨年の3月か4月頃だったと思う。“これが最後の依頼だ”というメールに気づいた。学会開催のアナウンスと思って削除していたらしい。添付文書を見ると、“突然死予防のための心電図スクリーニング(学校心臓検診)の費用対効果”についての招待口演の依頼であった。米国はこれまで健康者を対象とする心電図スクリーニングに全く興味を示していなかった。天下のAHAからの依頼である。私自身も感激したが、日本小児循環器学会の友人たちも喜んでくれた。発表までかなり緊張していたらしい。折角の晴れ舞台なのに写真を撮ってもらうのを忘れていた。心配していた20分の発表と30分の討論時間が瞬く間に過ぎていた。

今年も何かいいことがあるよう、臨床と研究を続けて行きたい。

(文責：小児科部長 吉永 正夫)



APHRSにて。山下先生と田上先生



アムステルダム大学にて。左から水澤先生、インゲさん、筆者、埼玉医大・住友教授



Wilde教授の部屋で。左から日大・鮎沢先生、筆者、Wilde教授、住友教授

クリスマスコンサート

クリスマスコンサートが今回で開催10回目を迎えました。今回も昨年同様中庭を憩いの場として整備、イルミネーションを設置するなど、クリスマスコンサートを執り行うのにふさわしい華やかなステージを設営することが出来ました。

コンサートの開会式では皆越副院長と大塚医局長から患者様への癒しの気持ちを込めた挨拶の言葉を頂きました。その後コンサートのオープニングとして、つくし保育園児達による元気いっぱいの歌を披露して頂きました。歌の後には2名サンタさん（古川管理課長？有馬相談係？）とトナカイ（米森医療安全係長？井出師長？）からプレゼントをもらい、満面の笑みの子や、反対に泣き出す子がいたり大盛り上がりでした。

2番手は看護学生による息のあったコーラスでした。「ジングルベル」「赤鼻のトナカイ」「サンタが町にやってくる」の3曲を歌っていただき、楽しいクリスマスソングと愉快な振り付けを披露して頂きました。特に3曲目の「サンタが町にやってくる」では患者様も一緒になって振り付けを行うなど会場一体となって楽しんで頂きました。

3番目は看護師長会によるハンドベルです。先ほど出て頂いたトナカイの指揮の元、会場はハンドベルの優しい音色に包まれ、とても感慨深い気持ちにさせられました。

4番目はオペラ歌手によるクリスマスソングでしたが、ここでハプニングが起こり、前日になり当初予定していた方が出席出来ないということになりました。そのため対応に追われていたところ、その方の先生であり、世界で活躍されるオペラ歌手の片野坂栄子さん、ピアノの寺園玲子さんに急遽出席して頂けることになりました。優しくも力強いその圧倒的な歌声に会場中が酔いしれ、溢れんばかりの拍手が沸き起こりました。患者様にも大変ご満足いただけたかと思えます。

最後に披露して頂いたのは昨年もご出演頂きましたサザンウインド吹奏楽団に演奏して頂きました。「サウンドオブミュージックメドレー」や「星に願いを」、美空ひばりさんの「川の流れるように」などバラエティーに富んだ心温まる演奏を披露して頂きました。

閉会の挨拶として上別府看護部長により、無事にコンサートを終えることができた感謝の気持ちを込めてあいさつを頂きました。

コンサートの余韻が冷めやまない中、患者様並びにご家族にティーパーティーに移って頂きました。調理師さんの力作の見事なデコレーションスイーツときれいに盛りつけられた果物、温かいコーヒー・紅茶をゆっくり堪能して頂きました。

クリスマスコンサート全体を通じて、患者様のおもてなし・ご配慮が細部まで行き届かない点もあったかと思いますが、職員皆で少しでも療養の糧になっていただければとの思いで取り組みました。今後も微力ながら職員一同努めて参りたいと思えます。

最後になりましたが、ご出演頂きましたサザンウインド吹奏楽団、つくし保育園の園児達、看護学生の方々、看護師長会の皆様、そして急遽ご出演頂きましたオペラ歌手の片野坂栄子さん、ピアノの寺園玲子さんに、この場を借りてお礼申し上げます。

また、クリスマスコンサート実行委員の皆様、準備を手伝って頂いた医療サービス向上委員会の皆様、栄養管理室の皆様、ボランティアでご参加下さいました学生さん・職員の皆様にも、この場を借りて感謝致します。

(文責：財務管理係長 吉岡 幸宏)



■お問い合わせ先

独立行政法人
国立病院機構

鹿児島医療センター (循環器・脳卒中・がん専門施設)

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号

(代)TEL 099(223)1151 FAX 099(226)9246 <http://www.kagomc.jp>

【地域医療連携室】 園田・四丸・永重・重吉・森・鷲頭・吉留・山口・酒井・櫻木・竹田津

直通電話▶099(223)4425 フリーダイヤルFAX専用▶0120(334)476

※休日・時間外は当直者で対応します。

